

スパルタの対アルゴス策

新村 祐一郎

【要約】 スパルタが最も古くから交渉を持っていたのは東隣のアルゴスとその周辺(アルゴリス)であった。本稿では、まず、前八世紀以来のスパルタとアルゴスの対立関係を前七世紀のヒュシアイの対戦まであとづけ、これまでの対アルゴス戦は、もっぱらエウリュポーン王統によって熱心に行なわれたことを論証する。前六世紀中ごろ、スパルタは対外政策を征服から友好へと変更するが、その主たる対象はアルカディアであった。この政策転換の真の目的はメッセニア対策であると同時に、アルゴスを孤立させることにあり、この政策変更も対アルゴス策が一つの眼目となっていて、ヒュシアイの敗戦と第二メッセニア戦争以後の諸改革は、すべてこの政策転換への布石であった。すなわち、メッセニアを確実に抑え、アルカディア(南部)と友好関係を保って、アルゴスを孤立せしめ、もってスパルタの安泰をはかる、というのが前六世紀中葉以後の対外政策だったのである。

史林 五八巻一号 一九七五年一月

一、はじめに

古代スパルタの歴史のうち、もっとも不明な点が多いのは、前七世紀から六世紀の初頭にかけての時期である。しかし、この期間にスパルタは最大の危機であったともいえる第二メッセニア戦争を経験しており、また、おそらくその戦争よりも後に、社会的政治的改革がなされた、と推論できる。それが如何なるものであるかについては、かつて拙論で若干触れたことがある^①。

本稿では、スパルタとその東隣のアルゴスとの外交関係をその初期から考察し、それが前六世紀中葉のスパルタの政策転換とどのようなかわりがあるかを考察したい。

メッセニアを征服した前八世紀後半以来、スパルタにとっては、メッセニアの反乱を如何にして抑えるかが問題になったであろう。メッセニアの反乱は、当然のことながら、スパルタが内外いずれかの点で不安定な時期に行なわれる可能性が高い。そこでスパルタにとっては、不安定な状況を作り出す要素を除去する必要があった。かつて筆者は「Tyrtaiosの詩に eunomia が強調され、Terpandros の詩に dike が強調されるのは、eunomia と dike とが必要な時代を反映しているのではないか」と推察したが、「善き秩序」の保たれる状態が国内に確立されることは国内での不安定要素が減じることであって、その詩の底には、対メッセニアということも、同時に考えられているのである。しかし、スパルタは対外政策という面では、不十分であった。Hysiai でアルゴスと対戦し、敗退したことは、結局、メッセニアの反乱（第二メッセニア戦争）を惹きおこす契機となった。しかもその際、エリス、アルカディア、アルゴスがメッセニアを援助している(Strab. VIII. 4. 10; Paus. III. 15. 7) ④ ことはスパルタの外交政策が不十分であったことを示しているともいえる。

① 拙稿「第二メッセニア戦争とスパルタ」(『西洋古典学研究』XXI—

九七三年、二〇—二八頁)。同「スパルタの政治組織に関する覚書」

『大手前女子大学論集』七、一九七三年、一三八—一五〇頁)。

② Forrest, W. G., *History of Sparta, 950-192 B.C.*, 1968, p. 64.

③ 前掲『大手前女子大学論集』七所載拙稿、一三九頁参照。

④ Strabon はこの他に「ヒサを、Pausanias は「キネオンを加えてい

二、前八世紀のスパルタとアルゴス

第二メッセニア戦争でメッセニアを援助した国々のうち、より古くからスパルタと交渉のあったのはアルゴスである。ギリシア人はアルゴスの支配者をヘラクレイダイの一人である「Tenanos の系統をひくもの」としていたが、いずれにせよ、侵入したドリス人を主体とする市民を中核とした国家であった。しかし、スパルタと同様に、多数の非ドリス人も含まれていたと考えられる。

Pausanias がその第三巻の冒頭で、スパルタの両王家の系譜をたどりつつ、各王またはその治世中の事跡に触れている

のは、周知のところであるが、その中で比較的初期の王達の時代にアルゴスとの交渉が多くあった。すなわち、アギス系では、名祖アギスの孫ラボタスの時に、Kynuria 地方をめぐってアルゴスと戦った、この記事 (Paus. III. 2. 3) があり、テレクロスの子アルカメネスの治世に Helos を陥れ、アルゴス人との戦争に勝利を得た (III. 2. 7) と述べている。一方エウリュポノン系では、はるかに多く、名祖エウリュポンの子プリュタニスの時代にアルゴスに敵意を抱きはじめたが、時期的には、それが Kynuria をめぐる争以後であることを指摘し (III. 7. 2)、プリュタニスの曾孫カリロスの時代にはアルゴスに侵入し (III. 7. 3) その子ニカンドロスの治世にもアルゴリスを侵略したが、その時に Asine の住民がスパルタに協力したため、のちに彼らはアルゴスによって亡ぼされた (III. 7. 4) とする。更に、ニカンドロスの子テオポポスの時代になると、まずメッセニア戦争があって、それから後、テオポポスの晩年になってから、Thyreatis めぐって、アルゴスと争った (III. 7. 5) と述べている。

ところが、アギス系ではアルカメネス時代、エウリュポノン系ではテオポポスの時代以降は、アルゴスとの不和乃至対戦の記事が、かなり長期にわたって見られなくなる。いわゆる Hystiai の敗戦についても、第三巻には記述がなく、II. 24. 7 に簡単な記述とその時期——ペイシストラトスがアテナイのアルコンの年、第二十七オリュンピアードの第四年——を述べているに過ぎない。もっとも、G. L. Huxley^① はテオポポスの治世の末年のアルゴスとの争を Hystiai の会戦と見なしているが、テオポポスの治世に 669/668 B. C. までを含ませるには、かなりの問題があり、Hystiai の戦の記述はスパルタ王の事跡表の中には記されていない、と見るのが妥当である。^②

以上の Pausanias の記事は、すべてテオポポス以前の事跡であるから、それぞれの王の実在性についても、多少問題がある。しかし、スパルタが古来アルゴスと不和であったことをここから読み取ることにはできる。そして、特にエウリュポノン系に対アルゴス戦を伝えるものが多いのは、この家系が対アルゴス戦における戦功で実力をたくわえたのではないか、と思わしめる。もちろん、Pausanias の記述をそのまま真実とは受け入れられないところもあるが、メッセニア戦争

の時に、テオポンボスがそれを指導すべき地位にあったことは、この家系が彼の直前までに、相当な実力を得ていたことを示すのではなからうか。

また、考古学の教えるところによると、Asine は前八世紀の後半乃至末近くに、おそらくアルゴスによって破壊されたことが明らかになっている。^④これはニカンドロスの治世年代を推定する唯一の根拠となっている。Huxley^⑤はニカンドロスの Asine 援助がアルゴスによる Asine 征服より以前であるところから、ニカンドロスの治世を前八世紀後半乃至末期と考えており、Forrest^⑥も c. 750-720 B. C. としている。

一方、Helos の征服については、その時期が Pausanias はアルカメネスの治世としている。Toynbee と Tomlinson^⑦は、ともに、はっきりした時期を指摘していないが、前八世紀の後半と推定しているようである。また、Huxley^⑧も時期は前八世紀末期と考えているが、彼はフェイドンの時代を前八世紀中葉と見ており、スパルタによる Helos の征服はフェイドン死後のアルゴス弱体化の結果とするところに特色がある。^⑩更に、Forrest^⑪はアルカメネスの治世を c. 740-700 B. C. とし、Helos の攻撃は第一メッセニア戦争（彼によると c. 735-715 B. C.）以後としているから、715-700 B. C. 頃すなわち前八世紀の末となる。この Helos の征服については、アルカメネスの治世という手がかりのみであるが、その治世が多くの論者において、前八世紀後半という点では一致している。

前八世紀後半という第一メッセニア戦争の時期であり、この戦争と前述のニカンドロスによるアルゴス侵入、およびアルカメネスによる Helos 征服の前後関係が問題となる。まず Huxley^⑫はメッセニア戦争を c. 736-716 B. C. とみているが、アルゴス侵入は戦争直後、Helos 征服はメッセニア戦争開始後としている。すなわち、Helos 征服はメッセニア戦争と平行して行なわれた可能性を認めている。これに対して、Forrest^⑬はメッセニア戦争の時期に関しては Huxley と同意見、と見てよいが、Helos の攻略は戦争後であり、アルゴス侵入は戦争中の 720 B. C. 頃としており、前後関係は Huxley の如きではない。そのほか、Toynbee^⑭も Helos をめぐる争がメッセニア戦争より後である可能性の存す

ることを指摘している。

しかし、いずれにせよ、前八世紀後半にメッセニア戦争とほぼ同時期に、Helosの征服が行なわれたことは認められよう。アルゴリス侵入とその際のAsineの助力も多くの論者の認めるところであるが、Toynbee⁵⁾はスパルタのアルゴリス侵入の最初はHyksaiの戦の際で、前八世紀のものはKynuriaをめぐる争とともて虚構として居る。Kynuriaの獲得を直指すスパルタの攻撃はその時期から考えても、現実性を疑う論者は少くないが、ニカンドロスのアルゴリス侵略とAsineの対応とは疑われていない。

いま一つの問題はカリロス(カリラオス)のアルゴリス侵入とTegea征服の失敗である。Tegea征服の失敗についてはPausanias(VIII. 48. 4-5)もその経過を述べているが、彼が何故Tegeaを攻撃したかが問われなければならない。彼と次のニカンドロスと更に次のテオポンポスの末年にも、アルゴリス攻撃がくり返されている。彼らが如何なる方面からアルゴリスを攻撃したかは推定する以外にないが、Parnon山脈の北端付近を越えて、Thyreatisの西方に出るのが最も常識的な道であろう。テオポンポスの時代の末にThyreatisをめぐる争った、というのであるから、おそらくテオポンポスの一、二代前から、この方面よりの攻撃を続けていたものと考えられる。とすると、カリロスのTegea攻撃はParnon山脈越えがアルゴスの勢力によって阻まれたため、迂回路を求めたものと断ぜざるを得ない。スパルタから北へ道をと、アルカディア南東部のTegeaから東へ進めば、アルゴリスのHyksaiに至るからである。しかし、その際カリロス王自身も捕えられた(Paus. VIII. 48. 5)とどうのであるから、これも失敗したのである。したがって、エウリュポン系の諸王によるアルゴリス侵攻も、事实上、ニカンドロスの時代に始められたのではないかと推測される。ここで問題になるのは、Herodotosの記事である。すなわち彼はI 66で、スパルタは軍をTegeaに進めたが、Tegeaに破れて、多くのものが捕虜となって、Tegeaの島地の測量をするために使役された、という主旨の発言をしている。この部分の内容はPausaniasの伝えるTegea攻略の失敗談ときわめて類似しており、同じ事件の記事と思われるが、

Herodotosの記事には、これが誰の治世の事件であるのか、明言されていない。ただ前後の文脈から考えてみると、レオンとヘゲシクレス兩王の治世か、あるいは、その一代前で、それより古くはない事件ということになる。しかしながら、Herodotosのこの部分(I. 65-66)にも、多少混乱が見られる。レオンとヘゲシクレスの直前まで、スパルタはギリシア中で最も悪く治められていたポリスであって、それに大改革を行なったのがリュクルゴスである、とHerodotosはいうが、レオンとヘゲシクレスの治世は前六世紀初頭以前には遡り得ない。ところが、そのリュクルゴスの時代はレオボタス(Pausaniasはラボタスと記している)の頃、としているが、アギス系の伝承によると、レオボタスはレオンよりも一〇代以前の王となっている。したがって、このいわゆるリュクルゴスの改革の時期に関するHerodotosの記事は、前後の文脈と合致しない。しかし、次いで彼はリュグルゴスの死後、間もなく、Tegeaの攻撃が始まった、と述べ、前述の事(Tegeaの攻撃に失敗し、逆にTegeaの捕虜になったという)に続くのである。Herodotosは更に、その後(I. 67)で、アナクサンドリダスとアリストンの時代(レオンとヘゲシクレスの次代)に、ようやく、Tegeaに対して優位に立った、とこう。

以上の記事は、要するに、Herodotosよりも前の時代に、すでに立法者リュクルゴスがレオボタスの摂政として、改革を行なったという伝承が定着していたことを示している。と同時に、Herodotos自身は、何らかの改革期があるとすれば、Tegeaその他アルカディア諸地方への征服戦争直前と考え、その改革をリュクルゴスと結びつけたために、混乱が生じたのである。Herodotosにとっては、リュクルゴスはアギス家の王族であったが、彼をエウリュポン家の王族とする伝承も生じた。すなわち、Pitarchosはリュクルゴスの伝記については、様々の異説があることを認めながらも、彼をエウリュポン系のポリュデタテス王の兄弟で、次王カリロスの叔父としている。しかも、Pitarchosによれば、カリロスが生れた時、ポリュデタテスはすでに死去しているから、当然リュクルゴスは摂政というべき地位にあった(I. 68. 3)であろう。この伝承にしたがえば、リュクルゴスはカリロスよりも年長であるが、カリロスの若年の時代には生存してい

たことになる。一方、Herodotos はリュクルゴスの死後、間もなく、Tegea 攻撃が始まったことを示唆している (I. 66) ので、その伝承と考え合わせるならば、少くともエウリュポソン系の伝承では、カリロスが成人したのち、Tegea の攻撃が始まった、ということになる。以上のような経緯で、Pausanias は Herodotos の伝える Tegea 攻撃の指導者をカリロスと断定したものと推定される。また、Pausanias はラボタスのあとを継いだドリュノスと更にその次のアゲシラオスは、ともに、即位後間もなく殺害されたが、そのアゲシラオスの時に、リュクルゴスの立法事業が行なわれた (III. 2. 4) と述べている。このアゲシラオスは名祖アギスから数えて五代目であり、カリロスは名祖エウリュポソンから五代目であるから、年代的に多くの懸隔がない、と推定されるのみならず、アゲシラオスの次のアルケラオスはカリロスと協力して Aigys を占領している (Paus. III. 2. 5)。以上の関連から、立法者リュクルゴスはエウリュポソン系では、カリロスの幼少時代に立法を行なったことになる。^⑤

しかしながら、Herodotos の伝える Tegea 攻撃とその失敗は、はるかにのちの時代、すなわち、前六世紀の初頭のものであると推定されることは前述した通りである。したがって、カリロスが Tegea を攻撃した、というのは Pausanias またはそれ以前の伝記作者の創作である、と思われる。その上、エウリュポソン家の初期の王達の實在性はきわめて疑わしい。^⑥ ニカンドロスの子テオポンポスあたりから、實在性が明確になってくる。それ故、カリロスの Tegea 攻撃、アルゴリス侵入のみならず、彼の實在性そのものも明確ではなく、また、カリロスと離れても、前八世紀の前半に、スパルタが Tegea を攻撃したということも、きわめて疑わしくなってくる。

しかし、カリロス、ニカンドロス、テオポンポスの三代にわたって、アルゴリスに侵入したという伝承を持つエウリュポソン系に対して、アギス系はその實在性も不明確なラボタスのアルゴリスとの対戦以外には、アルゴリスへの侵入を示す伝承を持っていない。むしろアギス家はエウロタス川沿いにラコニア南部に向けて勢力圏を拡大しているようであり、テレクトロスも Amyklai のほか、ラコニア中部の集落を服属させた、とどう伝承を持つのである (Paus. III. 2. 6)。次のアル

カメネスの時に、アルゴスと対戦しているが、これは Helos をめぐっての争であり、エウリュポソンのアルゴリス侵入とは別種のものである。アギス系のラコニア南下政策は、当然、最終的には、エウロタス下流域にまで及ぶから、その際、Helos の征服が目標とされる。いづれにせよ、アギス家の伝承には、積極的にアルゴリスへ侵入したことを示すものは皆無といってよく、同家の対外関係はメッセニアとの間の問題の方が重要だったように思われる。テレクロスはメッセニア人に殺害された、という伝承を持っている (Paus. III. 2. 6 & III. 7. 4)、アルカメネスの子ポリュドロスの治世に、メッセニア戦争はその頂点に達したという (Paus. III. 3. 1)。

以上のように、アギス家はスパルタからエウロタス川に沿って南進し、スパルタの支配権を確立していったが、アルゴリスの侵入は目指しておらず、メッセニア方面に関心があつたのに対して、エウリュポソ家は、もっぱらアルゴリス侵入に勢力を集中しており、アギス家よりも劣勢だった指導者^⑧が対外戦争によって、東方に領土を獲得し、名声を得んとする姿がそこに見出されるのである。ポリュドロスの時代にメッセニア戦争が激しくなり、アギス系の勢力だけでは不十分になった時、はじめてエウリュポソ家のテオポソスがこれに協力して、スパルタの勝利に導いたのである。ここに両家の協力関係が推定されるが、両家の協力は、このような非常な事態に限られている。

以上述べてきたところから推察すると、アルカメネスによる Helos 征服はメッセニア戦争直前か開始直後、すなわち、メッセニア戦争の初期に平行して行なわれたと見るべきであろう。ニカンドロスの時期は、当然、メッセニア戦争以前と考えられるから、ニカンドロスのアルゴリス侵略が最も早く、次いでアルカメネスの Helos 征服が第一メッセニア戦争の初期と平行して行なわれ、メッセニア戦争後やあつてから、ふたたび、アルゴリスに、侵入 (テオポソス王の末年の) している。また、アルゴスが Asine を攻撃し破壊したのは、考古学上の発掘によると、前八世紀の最後の四半世紀よりも後ではないことになる故、^⑨スパルタがメッセニア戦争に集中していた時期と考えられる。

この時期までは、対アルゴスと対メッセニアとは、スパルタ内のそれぞれ別個の有力者によって、互に無関係に交渉が

あった、といえよう。以上見てきたように、スパルタとアルゴスとの敵対関係は、かなり古くからである。スパルタ側では、主として、エウリュポンス系であったが、アルゴス側もかなりの対抗意識を持っていたことは、Asine をスパルタに協力した報復として破壊したことにも現われている。

スパルタとアルゴスとの接触は、ニカンドロスのアルゴリス侵入から確実となるが、Pausanias はその原因については何も触れず、ただ、多くの土地を荒廃させた、というのみである。次いで、アルカメネスの Helos 征服で、当然、アルゴスとの対戦が予想されるが、Helos が以後スパルタの勢力下に置かれたことから推察すると、スパルタ側の優勢のうちに終ったのであろう。その後、スパルタはメッセニア戦争に全力を投入するが、それが終り、テオポンポスがアギス家に劣らぬ権威を確立すると、再度、アルゴリスの Thyreatis をめぐってアルゴスと争う。Pausanias によると、テオポンポスが老年のため、直接、軍隊を指揮していないが (III. 7. 5)、この戦争がエウリュポンス家の指導の下に行なわれたことは、同時代のアギス家の王 (ポリュドロスまたはエウリュクラテス) には、アルゴスとの対立を推測させる伝承がないことからも明らかである。ことに、Pausanias では、エウリュクラテスの治世には、メッセニア人はスパルタ人の支配に服しており、アルゴス人も何も事を構えていない (III. 3. 4) と述べている。これが真実とすれば、Thyreatis に関する争は、いまだ、アギス家のポリュドロスの存命中に、エウリュポンス系が行なったことになり、Hysiai の戦闘は、おそらく、エウリュクラテスの一代後ということになる。いずれにせよ、対アルゴス戦は、依然として、エウリュポンス系が熱心であったことが知られる。

スパルタとアルゴスとの対抗関係は、Tomlinson²⁴⁾ によると、アルゴスの Helos 干渉とスパルタの Asine 援助に始まり、それ以来、両国間の長期にわたる対立が続く、としている。また、Tyndee²⁵⁾ も Helos をめぐるスパルタとアルゴスの争が両国間の最初の衝突としている。いずれにせよ、メッセニア戦争の始まった頃から、アルゴスとの対立も本格化してくるのである。

この年代を、ニカンドロスによるアルゴリス侵略と見なしている。Huxley は第一メッセニア戦争の末期にテオポンポスの治世の開始期を考えているが、Tytaios がテオポンポスをメッセニア戦争の時の王、と呼んでいる以上、その戦争の時期の大部分は彼の治世と重なる、と見るべきである。第一メッセニア戦争の時期については、前八世紀の後半という点で、多くの論者は一致しており、Huxley のいう如く 740-710 B. C. のうちの時期と見るのがプロバブルである。とすれば、テオポンポスは、すでに 730 B. C. 頃には王位に就いていたと推定しなければならない。テオポンポスの治世は Pausanias によると、かなり長期間にわたっていたようであるが、彼の治世と第二メッセニア戦争時代の王安タクシダモスとの間に一代（ゼウクシダモス）あるから、テオポンポスが 669/668 B. C. の Hysiai の合戦またはその直前まで存命していたとは断じ難い。したがって、テオポンポスの治世の末年は前七世紀の最初の四半世紀のうちにあると思われる。それ故、「Thyreatis をめぐるアルゴリスとの紛争は前七世紀初頭、ということになる。

スパルタは第一メッセニア戦争後、間もなく（前八世紀末葉）、Political trouble の解決策と考えられるタラスへの植民者を送り出したのち、アギス家・エウリュポソ家の覇権が確立され、二王制が成立した、と推論される。676 B. C. にスパルタではカルネイア祭が行なわれた。かつて筆者は、その祭に付随する軍隊パレードが、特にメッセニアに対する威嚇の意味を含むもの、と推定したが、もちろん、これが同祭典の主目的であったとは考えられない。Forrest は 676 B. C. を、貴族政治を廃し、一般民衆に正義と平等と秩序を与えた改革の年、とし、リュクルゴスとポリュドロスを中心とするグループによって達成された、と見ている。Forrest は前七乃至六世紀は秩序と正義の求められる時期であったことを強調するが、もしこの時に改革があったならば、それは一般民衆よりも、むしろ貴族間に秩序と正義を与えたもので、軍事的、政治的理由から貴族の一致団結をはかるものであり、これによって、王は *primi inter pares* の地位にあるものとし

て、貴族政を確立せんとするものであった、と見るべきである。これによって、その後は王の間に意見の相違があっても、スパルタの有力貴族に政策の決定権がゆだねられたことになる。しかしながら、軍隊の指揮権は王に与えられているから、王が完全に無力化させられたとは考えられない。

ところで、カルネイア祭から数年後に、Hystraの会戦がある。この会戦と前記の Thyreatis 侵入とは直接結びつくものではないが、きりとして、全く無関係とはいえない面を持っている。

- ① Huxley, G. L., *Early Sparta*, 1962, p. 53.
- ② ①の Huxley の見解については Hammond, N. G. L., *Studies in Greek History*, 1973, pp. 98-100 に反論がある。
- ③ Tyrtaos, fr. 4, 1-2 に *ῥητέπου πατρίδι, γεταί ἄλλα θεοδίκου, ἢν δὲ Μεσσηνίῳ ἐβόλεσεν ἀβύζουρον*, がある。
- ④ Huxley, *op. cit.*, p. 21; Tomlinson, R. A., *Argos and the Argolid*, 1972, p. 75.
- ⑤ Huxley, *op. cit.*, p. 21.
- ⑥ Forrest, *op. cit.*, pp. 21 & 36.
- ⑦ Toynebe, A. J., *Some Problems of Greek History*, 1969, pp. 178 & 179.
- ⑧ Tomlinson, *op. cit.*, pp. 75-78.
- ⑨ Huxley, *op. cit.*, p. 30.
- ⑩ Pheidon の時期については前八世紀説と前七世紀説があるが、今日では Huxley 以外は後説を採っている。
- ⑪ Forrest, *op. cit.*, pp. 21 & 36.
- ⑫ Huxley, *op. cit.*, p. 26 & pp. 30-31.
- ⑬ Forrest, *op. cit.*, p. 36.
- ⑭ Toynebe, *op. cit.*, p. 179.
- ⑮ Toynebe, *op. cit.*, p. 184 n.
- ⑯ リタルコスについては多くの問題があるが、スパルタ人のリュコスと親とすの変遷については、稿をあらためて論ずる予定である。
- ⑰ 拙稿「スパルタの二王制をめぐって」三の問題」『史林』四八—二、一九六五年、一〇二—一九頁、一—四頁。
- ⑱ キワリキホンの家の指導者 (*ἀγορευτής*) である。当時まだ、まだ二王制が確立を待たないと考えられる。
- ⑲ これらの諸事件の前後関係については、やはり Huxley や Forrest の所説を紹介したが、テレタロスの殺害された時は「すでにキワリキホンの家はリカメロスの時代である (Paus. III, 7, 4) から、リカメロスの時代の方がアルカメネスの時代よりも早くはじまっている筈である。
- ⑳ Huxley, *op. cit.*, p. 21 の *ἀπὸ τῶν ἑταίρων Ἀσινε ἑταίρου* 出土の陶器はすべて前八世紀の最後の四半世紀より後のものである。なお、Huxley 独自の見解については O. Frédin/A. W. Persson の “Asine” (雑著未見) に検討がある。
- ㉑ Tomlinson, *op. cit.*, p. 79.
- ㉒ Toynebe, *op. cit.*, p. 179.
- ㉓ Tomlinson, *op. cit.*, p. 80.

②⑦ Huxley, *op. cit.*, p. 31.

②⑧ 本章前註②参照。

②⑨ Huxley, *op. cit.*, p. 113.

②⑩ 前掲『西洋古典学研究』XXI 所載拙稿、一二三頁参照。

②⑪ Forrest, *op. cit.*, pp. 61-67.

三、ヒュシアイの対戦

スパルタは前七世紀前半(669/668 B.C.)に、何故アルゴリスの *Hyria* に侵入したのであろうか。一般的な傾向からすれば、前七世紀には、すでにスパルタ、アルゴス兩國とも、その領域を拡大しており、*Parion* 山脈を境にして、両者が対峙する形勢に到達していた、といえる。したがって、この時代から、その境界線をめぐっての争がおこりやすくなるのである。Tomlinson^①によると、アルゴスの勢力権拡大は二段階に分けられており、第一段階はアルゴス平野をアルゴスの支配下におくことであり、第二段階は隣接諸地方にアルゴスの宗主権を認めさせることであった。そして、その第一段階は *Asine* の征服をもって完成され、それが同時に第二段階の出発点となる。第一段階はアルゴリスの範囲内の問題であり、いわば国内問題であるが、第二段階になると、国際問題化してくる。*Asine* の場合には、スパルタとの関係が考えられる。

しかし、アルゴスとスパルタは前述の如く、*Parion* 山脈近辺での境界線乃至勢力範囲争い以来、その対立抗争が本格化してくるものと思われる。スパルタによる *Helos* 征服は、*Helos* がアルゴスの援助を期待している以上、国際問題化する要素はあるが、スパルタにとって、ラコニア内部の問題は国内問題として処理すべきものであり、アルゴスにおける *Asine* 問題と同種のものであったのである。

それに対して、*Thyreatis* をめぐる争いは、両者がそれぞれアルゴリス、ラコニアにほぼ覇権を確立して以後の勢力圏拡大競争ともいうべき様相を呈してきている。スパルタによる *Thyreatis* の侵入の年代は、前章で述べた如く、前七世紀の初期と想定されるが、それはある程度の成功を収め、短期間ではあったかもしれないが、スパルタの勢力圏となったも

のと推定される。

そのうち、スパルタ軍は 669 B. C. に Hysiai に至つてゐるが、スパルタから Hysiai に至る道は Tegea を經由するのが一般的である。しかし、その当時、Tegea はいまだスパルタの勢力圏外にあり、スパルタ軍がその道を通過するとなれば、何らかの抵抗があることは当然予想される。とすれば、スパルタ軍が Hysiai へ至るには、Thyreatis 方面から迂回する他はない。では、なぜスパルタは Hysiai へ向つたのか、少くとも Hysiai またはその方向へ向つて進んだのか。

アルゴスとスパルタとの間に、ペロポネソスをめぐる覇権争がすでに意識されており、その一環として、アルゴスへ至る道筋に当る Hysiai の獲得を目指したものと見方も可能である。スパルタがすでにその覇権獲得の目的で、Thyreatis を侵略しているならば、それを一歩進めたものとして、Hysiai 進攻は考えられなくもない。また、スパルタは前八世紀末にメッセニアに覇権を確立しているから、東隣のアルゴリスへの進出も考えられる。しかし、一方スパルタ、アルゴス間のこれまでの対立は、スパルタではエウリュポン家の手で行なわれていたため、今回の場合も、二王制が確立された後とはいえ、エウリュポン家主導型のアルゴス攻撃ではなかったであろうか。Pausanias はゼウクシダモス、アナクシダモスの治世の叙述 (III.7. 6) では、アルゴスとの争も、Hysiai の地名もあげていないが、アギス系ではアルゴスとの抗争を否定している (Paus. III. 3. 4) から、両王家が一致してアルゴリス攻略を考えていたとは断じ難い。とすると、Hysiai の対戦がスパルタ、アルゴス両者のペロポネソス覇権争の一環と推定するのは早計である。Tomlinson はアルゴスにはペロポネソス全体の支配権を確立しようとした形跡は全くない、とし、むしろ、その意図がスパルタにあったが如き口調であるが、前述の如く、スパルタでは一王家のみを主体とする行動と見られるから、そこには、ペロポネソスの覇権よりも国内の他王家に対する牽制の意味の方が強そうである。Hysiai への進攻も、特に、この地を求めたのではなく、Thyreatis に対する支配権の確立が主目的だったと思われる。^③

また、これとは別の見方として、スパルタの真の目的は Tegea の攻略にあった、とする見方もある。アルカディア南東部にある Tegea からは、スパルタ、Thyrea (Thyreatis の中心地)、Hysiai (更に Kenchreiai を経てアルゴスへ至る道筋) への主要路が通じており、アルカディア東部を北上する道をも持つという交通上の要衝としての地位を Tegea は有していた。したがって、スパルタとしては、この Tegea を支配下におくことによつて、アルゴスを牽制しつつ、Thyreatis を保持することができ、アルカディア南東部をも勢力下におくことも可能となる。そこで、スパルタは Thyreatis から Hysiai を経て、最終的には Tegea を攻撃しようとする企図したものと考えられる。また、アルカディア南東部を勢力下におさめれば、アルゴスがアルカディアの諸都市、特に Tegea と同盟して、ラコニア地方を圧迫する可能性をも減じることができる。そして、これまた、エウリュポソ家にとっては、もっとも目的にかなつた方法——アルゴスからの危険を除去するという意味で——であつた。

スパルタの意図がいずれにせよ、目的達成のため、Thyreatis 方面から軍隊を北進させた。そして、アルゴス軍はこれを Hysiai で迎え撃つたのである。この時のアルゴスはフェイドンの治下にあつた、といわれている。そもそも、アルゴスのフェイドンの時期については、前八世紀中葉説と前七世紀中葉説とがあり対立しているが、今日では七世紀説が多く、近年では Bengtson Hammond^④ Forrest Tynbee^⑤ のほか、最近の Tomlinson^⑥ も、証拠は不十分である、としながらも、前七世紀説をとっている。フェイドンの時代が前七世紀中葉を含むとすれば、Hysiai の対戦の際、彼がアルゴスを支配していたことになる。Andrewes^⑦ は前七世紀初頭から hoplites を描いた壺絵がコリントスとアテナイより出現することから、前七世紀の最初の二十五年間にギリシア南部で hoplites system が採用され、新戦術 (hoplites に於ける phalanx tactics) も採用された、と認む。したがつて彼は、フェイドンの治下におびて、アルゴスにこの新様式の軍隊と戦術が定着したとし、この軍隊と戦術が Hysiai で効果を發揮した、と見ている。また、Tomlinson^⑧ は、アルゴスとスパルタとが同時に発展したにもかかわらず、Hysiai の対戦の時までにアルゴスが有利な立場を得ていたのは、新戦術と軍隊組織

のためであり、それはフェイドンによって達成されたところのポリスの所有する人的資源の増大にもとづく、と主張する。両者の間に、細部については意見の相違はあるが、Andrewes と Tomlinson に共通していることは、フェイドンの治下で新様式の戦術が導入され、また、この戦術がその性格上、多数の兵員を必要とするので、市民を主体として軍隊を構成するようになった、という点である。更に、フェイドンは、しばしば、最初の tyrannos といわれるが、Tomlinson は、タイラントをばポリスにおける平等主義への傾向を促進したものと評価している。しかし、この平等主義こそ、数多くの戦闘員——hoplites——を必要とする新しい戦術に應ずる軍事組織を形成するのに有用なものだったのである。

Hysiai の戦におけるスバルタ側の装備や軍隊組織が如何なるものであったのか、確実に示す資料は存在しない。しかしながら、前七世紀初頭に二王制が成立し、同時に貴族政が形成された、と推定されるところから、貴族を主体とする hoplites であつたと考えられる。すでに phalanx tactics が案出されているならば、当然、兵員数増加の方向をたどる筈である。しかし、スバルタではこの戦は、主として、エウリュポン系によって行なわれていることもあり、拳国一致体制を取っておらず、フェイドンによって確立された新軍隊と新戦術に圧倒されたのであろう。しかしながら、アルゴスはスバルタの勢力圏(ラコニア)には侵入していないから、Thyreatis はアルゴスに帰属したと思われるが、この戦によって、スバルタの軍隊全体が致命的な損失をこうむつたとは考えられない。多くの論者が主張する如く、Hysiai におけるスバルタの敗戦がメッセニアの反乱(第二メッセニア戦争)を惹起したならば、これに投入し得る軍隊が短時日のうちには形成不可能であるから、相当の軍力が残存していた、と見るべきである。けれども、phalanx tactics が一般化したつある時に当って、hoplites の増員は不可欠である。かくして、貴族層は富裕市民の軍隊への参加を求めねばならなくなり、その結果、市民が代償として、エフォロイ選出権を得た、との推論はすでに行なつた。

ところで、Hysiai で勝利を得たアルゴスのフェイドンは、スバルタには侵入せず、アルカディアを横断して Olympia に到り、祭典を自身の主宰の下に催してゐる (Hdt. VI. 127; Paus. VI. 22. 2) このフェイドンの意図は奈辺にあつたので

あろうか。すでに見てきたように、アルゴスとスパルタとの対立は古くよりあったが、もしフェイドンの意図がスパルタを圧倒してアルゴスの勢力圏を拡大するところにあつたならば、Hyksaiでの対戦後、直ちにスパルタの攻撃をする筈である。そして、それと同時にメッセニアがこのスパルタの敗戦を好機として、スパルタの支配に対する反抗を試みることも、十分考えられるところである。フェイドンはこれを予期していたのではないであらうか。

Tomlinson^⑧はスパルタの最初のメッセニア侵略(第一メッセニア戦争)によって、ペロポネソス諸国がスパルタを警戒するようになったとしても驚くに当らない、と指摘し、アルゴスの王が主導的な地位に立つ一種の協定(同盟といえる程強固なものではない)が諸国間で結ばれた可能性を認めている。更に、Hyksaiの対戦を単なる境界線紛争ではなく、スパルタがこの協定の盟主たるアルゴスに痛打を加えようと企図したものだ、とTomlinsonはいふ。たしかに、この種の協定乃至同盟の存在した可能性を否定することはできない。第二メッセニア戦争に際して、アルゴスとアルカディア諸都市とはメッセニア側に立って参戦しているからである。^⑨しかしながら、このきわめてメッセニア側に有利な状況の如くに見える第二メッセニア戦争も、最終的にはスパルタの勝利に帰している。戦争の初期には、Orchomenosの王アリストクラテスがメッセニアを強力に援助したために、スパルタ軍も苦境に立たされている(Paus. IV. 17. 2-9)が、アリストクラテスが去つてからは、事実上、メッセニアは孤立し、再度スパルタに征服されることになる。Tomlinson^⑩はこれについて、対スパルタ連合が効果を發揮しなかつた、と述べているが、実は、ここにフェイドンの巧妙な作戦があつたのではないであらうか。すなわち、彼はHyksaiでスパルタ軍を敗退させ、直ちにメッセニアがスパルタに対して反乱を起したのを見ると、スパルタをメッセニア問題に集中させておき、その間にスパルタ、メッセニアを除く全ペロポネソスに勢力を伸ばし、最終的には、ペロポネソスの覇権を握ることを目指したものと思われる。スパルタとメッセニアをできるだけ長期間戦わせておくために、フェイドンはスパルタを恐れる都市を連合して作られていた協定乃至同盟をもって、メッセニアを援助せしめ、彼はその間を利用して、エリスからOlympiaを奪い、アルカディアをアルゴスの勢力下におき、更

にコリントス方面に関心を向けている。メッセニアを援助すべきアルカディア諸都市は、盟主アルゴスがメッセニア援助に熱心でなかったため、更には、アルカディア人の反ドリス (anti-Dorian) 感情と相まって、ドリス人の支配者フェイドンの意図に忠実でなかったのではあるまいか。^⑦ 少くとも第二メッセニア戦争の期間に、アルカディアやアルゴリス方面から、直接スバルタが攻撃されたことを示す証拠は存在しないのである。

しかし、フェイドンはコリントスへの内政干渉中に死し、その内乱に際してキュプセロスが登場する、と Tomlinson は述べている。キュプセロスの僭主政は、伝統的な年代にしたがえば、657 B.C. となる。フェイドンの死もその前後とということになる。^⑧ 彼の死によって、アルゴスの覇権は不可能となったが、コリントスをはじめ、シキオンにもエピダウロスにも、いずれも非ドリス系のアルカディア人と関係の浅からぬ僭主が現れ、いずれも anti-Dorian = anti Argive 感情を持っていたので、アルゴスの関心はこの方向に転ぜられ、ペロポネソス南部でのスバルタ、メッセニア関係には大きな関心をはらわなくなった。Hysiai 以後、対アルゴス関係を暗示する記録が Pausanias のスバルタ諸王の事跡の中に現れないのは、このことを示しているのではなからうか。そして、このことはスバルタにとっては、まことに幸であった。この状況の下で、スバルタはメッセニアをより容易に屈服し、支配し得たのである。

- ① Tomlinson, *op. cit.*, pp. 75 & 82. ② Tomlinson, *op. cit.*, p. 82.
 ③ Tomlinson, *op. cit.*, p. 79. ③ Andrewes, A., *Greek Tyrants*, 1956, pp. 31-42.
 ④ Hysiai 及 Thyreatis からトルコに遠く渡りあつた僭主のことが、
 最上 Thyreatis に近う。
 ④ Bengtson, H., *Griechische Geschichte*, 2. Aufl., 1960, S. 81. ④ Tomlinson, *op. cit.*, p. 85.
 ④ Hammond, N. G. L., *History of Greece to 322 B. C.*, 1959, p. 141. ④ 第一章註①の拙稿参照。
 ④ Forrest, *op. cit.*, p. 71. ④ Pausanias はこの事件を第八オリエンピアードとしているので、
 ④ Tynbee, *op. cit.*, p. 287. ④ 748 B. C. となるが、多くの論者は、これを第二十八オリエンピアードの誤写と見て、668 B. C. 以前とすべき。なお Tomlinson, *op. cit.*, p. 82 参照。

⑭ Tomlinson, *op. cit.*, p. 83.

⑮ 第一章参照。

⑯ Tomlinson, *op. cit.*, p. 83.

⑰ アルカディア人の反ドリリス感情については後述(本章後段及び次章

参照)。

⑱ Forrest, *op. cit.*, p. 71 45 c. 655 B. C. と云ふこと。

⑲ Forrest, *op. cit.*, p. 71; Tomlinson, *op. cit.*, p. 84 参照。

四、スパルタの対外政策転換の意義

第二メッセニア戦争では、スパルタ側も、相当な被害を受けたであろうことは推察される。その後、国内では若干の改革が行なわれたと思われるが、前七世紀後半のスパルタ社会について、Huxley^①とForrest^②はきわめて平和的な雰囲気を想定している。しかし、この雰囲気は表面的なものであった、と思われる。メッセニアの反乱は、当然、再発の可能性を蔵しているし、アルゴスからの攻勢の危険性もなくなっていないから、この時期も、実は、相当の緊張があったのではなからうか。ただ貿易活動が盛であったから、スパルタの経済的繁栄は事実であらう。

600 B. C. 頃、メッセニアに関連して、何らかの事件が発生した可能性がある。Huxley^③やWade-Gery^④などは、いずれも、この時期に何らかの争のあったことを論じている。これを史料的に証明するのは、きわめて困難であるが、Wade-Gery^⑤によると、Herodotosはスパルタのアルカディア征服戦争が600 B. C. 頃からはじまっていることを暗に指している、といい、その口火となったスパルタとメッセニアの争があった、と想定している。それがどの程度の規模のものであったかは、にわかには断定できない。が、そのような五十年近くにわたる戦争を続行し得る人的資源の確保のための改革がなければならぬ。すなわち、それがAnnoioiの創出であり、スパルタに特有の青少年の教育法——団体訓練を主体とする——の考案であった。このような、常時、軍事的生活を強いられる市民を形成するに際しては、若年からの訓練が必要であり、Annoioiの子弟は六歳から親許を離れて、国家の手で教育されることになる。以上のような特殊な軍事訓練が施されるようになったのは、600 B. C. 頃までに経済的にも十分な基礎を確立したスパルタが、メッセニアの反乱を直接、

間接に抑圧することを意図した時代からはまったもので、軍国主義的國家の基礎であるが、このような訓練をとまなう教育法が効果をあらわしはじめるのは、若干の年数を経てのちであろう。とすれば、前六世紀の最初の四半世紀こそ、軍国主義的國家への転換期であると断ずることができる。市民の多くが軍事的生活に服するようになったこの時代から、その市民の生活を維持するものは *heilotai* の労働となった。*heilotai* の主人に対する義務は主人の割当地で農耕に従事し、その農作物を主人に提供することであった。これ以来、彼らは国有とはいえ、事実上、私有に近い状態におかれることになり、彼らの地位は一段と低下した。と同時に、それは *heilotai* の新たな反抗を呼びおこす要因となり、その対策がスパルタ市民の頭を悩ますようになった。

ところで、スパルタのアルカディア征服戦争は順調に進んだようであるが、ただ一つ、Tegea の攻略だけは成功しなかった (Hdt. I. 65)。しかし、この際の Tegea 攻略計画は、もっぱら、アギス系の伝承にのみあらわれる。Pausanias によると、Tegea との戦争にエウリュクラテス、レオン、アナクサンドリダスの三代の王が取り組み、ようやく三代目が目的を達した、と云う (III. 3. 6)。ところが、レオンと同時代のエウリュポソンの王であったアゲシクレス (Hdt. ではヘゲシクレス) の治世は、その一代前のアルキダモスの治世とともに、いかなる戦争もなく、平穏だったと Pausanias は述べており、次のアリストンの治世にも、Tegea 征服のことには、全く触れていない (III. 7. 6-7)。この Pausanias の記事から考えると、アルカディア南部の征服全体が、もっぱら、アギス家主導の戦争だったのではないか、と思われる。Herodotos によると、スパルタが Tegea を征服したのは、リュディアのクロイソス王の時代であり、そのクロイソスがスパルタに使者を送って同盟を結ぶことを求めたのは 550 B. C. 以後と推定される。クロイソスはスパルタが Tegea に対して優位に立ったことをすでに知っているから、Tegea 征服は 550 B. C. 頃か、おそらくは、そのやや以前であり、キロンがエフォロスに就任した 556 B. C. 前後である。ところが、Huxley は、当時、アギス家がキロンの指導の下で philachaean policy を推進した、と云っている。彼によると、この政策は、要するに、スパルタが先住ギリシア人 (ア

カイア人)の支配者の正当な継承権を有するということの主張である。そして、それはドリス人、北西ギリシア人などの侵入を受けなかったアルカディア地方の住民に対する支配権を主張したものと考えられる。これは、すでにアルカディア南部の諸都市が、スパルタに征服されているという事実にもとづくと同時に、いまだスパルタに服属していない少数の都市に対する威嚇の意味を含んでいた。Tegeaもその対象となる一都市であった。

Tegeaのスパルタに対する抵抗は、かなり激しいものであったと想像される。Tomlinson^⑨は最初にはTegeaが勝利を得た理由について、スパルタが全軍隊の一部のみをTegea侵略に向わせたためか、あるいは、アルゴスによって支持されたアルカディア諸都市の連合軍がTegeaを支援してスパルタと戦ったためか、そのいずれかである、と考えているが、Tegeaとの対戦が、もっぱらアギス家の伝承にだけ現れていることから見れば、その前者の可能性が濃厚である。

ところで、HerodotosはスパルタのTegeaを征服し得た事情を説明するに当って、Delphoiの神託がオレステスの遺骨をスパルタに持ち帰れば、対Tegea戦に勝利を得るといったので、それを苦心の末、手に入れ、その後は、常に、スパルタが優位をしめるようになった、と述べている(1. 67-68)。このオレステスはトロイア戦争の際の英雄アガメムノンの子で、七十年間ミュケナイの王位にあり、その間、アルゴス、スパルタの王位をも継承し、九十歳で世を去った、とされている。

Forrest^⑩は560 B. C.より以後のある時点で、スパルタでは、オレステスはスパルタ人と見なされたといい、オレステスはアルゴリスを含むペロポネソス支配への要求権、先住ギリシア人(pre-Dorians)に対する忠節の要求権を持っているが、この二つの要求はオレステスをスパルタに結びつけることを考えついたスパルタ人達自身の要求であった、と述べている。とすれば、アギス家はオレステスを利用して、自身の主張するphylachaeon policyを遂行しようとし、そのために是非ともオレステスの遺骨が必要となったのである。Herodotosによると、このオレステスの遺骨政策はTegea征服のみに極限されて叙述されているが、更に深い意味があったであろう。

オレステスの遺骨移葬そのものの問題については、以前に、いささか考察したので、ここではごく概略のみに触れておく。

アルカディアは、全般に pre-Dorians の伝統を維持しており、そこに古い英雄の墓があったということは、十分理解できるが、スパルタ人にとっては好ましいことではなかった。当時、英雄の遺骨が埋められている土地は、その英雄に守られている、という信仰がある故、Tegea 付近にオレステスの墓があったことよって、アルカディアはこの遺骨のある限り、他から攻撃されても、安泰である、と考えられた。しかし、他方、英雄が国外で死んだ場合には、いったん、その土地で埋葬されても、のちにその故地に移される場合は多い。オレステスはミュケナイ、アルゴス、スパルタの王位を兼ねていたから、スパルタも彼の故地ともい得、ここに移葬される理由もあったのである。したがって、この遺骨の移葬によって、オレステスはスパルタを守る英雄となったのであり、それは同時に、アルカディアのみならず、メッセニアの反抗、アルゴスの攻勢に対しても、スパルタは優位に立てるといふ信念を持つようになった。Huxley は、先の philo-chaean policy の具体的表現が遺骨の移葬であると考えており、オレステスの遺骨が現に存在するスパルタの支配者こそ、ペロポネソスを支配すべき正当性を持つ、との宣伝的な意味があった、としている。

この Huxley のいうところも事実かもしれない。しかしながら、Tegea 制圧ののち、スパルタは外交方針の大転換を行っており、その問題と合わせ考えるべきである。

スパルタによる Tegea 征服によって、アルカディア南部はすべてスパルタの勢力下に入り、スパルタのアルカディア征服計画は完成したことになる。¹⁰⁾

ところで、Tegea 征服以前のスパルタの征服地に対する取扱は、原則として、一定の方式に従っていた。すなわち、被征服民を heilotai 身分におき、占領地が肥沃な土地である場合は、それを市民に対して割り当てることもあり、国家の所有地とされる場合もあった。スパルタ人は Tegea を征服した際にも、同様な方針をもつてのぞむつもりであった。し

かし、スパルタ人は、やがて、その方針を変更し、Tegea 人の heilotai 化を行なわず、彼らを perioikoi と同様な地位におくこととし、更に、同盟を結んで、メッセニア人を領内から追放し、メッセニア人をその町の市民に加えないことを約束させている。^⑩ スパルタが敵対関係にあったものに対して、これほど寛大な処置をとったことは、以前にはなかった。

そして、この時以来、スパルタはその政策を征服から友好関係の樹立へと転換したのである。その理由は、おそらく、スパルタ社会の内部に当然生じてくる不安であろう。600 B. C. 頃からはじまったスパルタのメッセニア北部からアルカディア南部へかけての征服はスパルタの勢力範囲を拡大したかもしれないが、それにともなつて、heilotai の数も急激に増大していった。しかも、その heilotai はスパルタに対立していた地域の住民であり、heilotai 化されているメッセニア人に同情的な立場をとる可能性が強い。総じて、heilotai はスパルタに反抗的であり、pre-Dorians の子孫も多く、anti-Dorian 的な意味からも、スパルタには好意を持たないものが多かった、と推察される。^⑪ したがって、これらの heilotai がメッセニアの被征服民をも含め、一致して協力した場合には、スパルタ市民は重大な危険にさらされるのである。また、同時に占領地の増加はその土地の配分をめぐって、内部的な争がおこる可能性をも有する。もし、このような争がおければ、heilotai の反抗に最も好都合な状況を造り出す結果になる。したがって、スパルタでは現在以上に heilotai 数を増大せしめる可能性のある征服戦争は、かえって危険の度を高めることになるとして、征服から同盟関係樹立へと一八〇度の転換を行なったものと推察される。この同盟関係を結ぶに際しては、先の Tegea との場合と同じように、メッセニア人の受け入れ拒否が前提条件となっているのである。

このように見てくると、オレステスの遺骨の移葬問題はこの政策転換と大いに関係がある。スパルタの外交方針の変更が、はっきりした形であらわれてくるのは Tegea 征服以後であるが、その転換はスパルタの内部では、以前から決定していたものと推察される。その一つの準備、しかも、きわめて重要な準備として、オレステスの遺骨の移葬があったのである。スパルタの他域との同盟関係は、もちろんスパルタを中心とするものであるから、スパルタを中心とすべき理由と

して、ペロポネソスのかつての支配者の故郷がスパルタであることを示す宣伝として、この移葬が行なわれたのであり、これは将来の同盟関係樹立に対する一種の布石だったのである。

先づ Huxley が philachaean policy なる用語を使用したことを述べたが、それとはいささか異なった意味で、philachaean policy が、当時、推進されたことは十分考えられる。それはスパルタ王家の系譜をヘラクレスに結びつけることであった。ギリシア人はペロポネソスへのドリス人の侵入、または、少くともその一部をヘラクレイダイの帰還という伝説的な表現で語っていたが、ヘラクレイダイがそのままドリス人だという意味ではない。Thucydides にもある通り (I. 12)、ヘラクレイダイとドリス人とは区別されており、ヘラクレイダイがドリス人をひきいてペロポネソスに入り、支配したと考えられている。しかるに、ヘラクレスは、本来、ペロポネソスの pre-Dorians の英雄であり、したがって、その子孫も pre-Dorians だということになる。それ故、現今のスパルタ王家は、pre-Dorians の後裔であり、ドリス人ではない、と宣伝し得る。スパルタ人がこのように彼らの王を pre-Dorians とした裏には、anti-Dorian 的気風の強いアルカディア地方を支配するための配慮だったのであり、その意味で philachaean policy といえるのである。とすると、スパルタ王家の系譜が最終的にヘラクレスと結びつけられたのも、この時代だったのではないか、と推察される。

かくして、スパルタでは、オレステスとヘラクレスの両者を通じて、様々な角度から、philachaean policy を遂行した、と考えられる。この政策は、しかしながら、二面を持っている。一方において、スパルタの支配権の正当性を主張しながらも、他方においては、同じ pre-Dorians として、アルカディア系の人達との友好関係を結ぶことを望んでいるのである。すなわち、スパルタの外交政策が攻撃的なものではないことを宣伝するのにも、役立ったのである。

スパルタの外交政策の転換は Tegea 征服のすぐ後に、その Tegea と同盟を結ぶ、という形をとっているが、決して、この時点で、突如として、政策が転換されたのではない。スパルタにとっては、メッセニアを確実に抑え、アルカディア南部でラコニアと境を接する付近の諸都市と友好関係を結ぶことが、第二メッセニア戦争以来、最も重要な問題となった

と思われる。第二メッセニア戦争の際、アルカディアの諸都市はメッセニアに好意を示していた。そこで、スパルタにとつては、メッセニアとアルカディアとの離間を策することになる。600 B. C. 頃、何らかのメッセニアの反抗運動抑圧と関連して、アルカディア南部を征服してから、いわゆる *Philaean policy* によつて、アルカディア諸都市を惹きつけ、メッセニア人を受け入れない、という条件で友好・同盟関係を結ぶ、というプログラムがあったのではなからうか。これは、いわば、アルカディア南部諸都市をスパルタの防衛線とし、メッセニアへの支配権を確実なものとすることによつて、アルゴスを牽制しようとする目論んだものではあるが、きわめて防禦的な体制である。アルカディア南部の征服でも、アルカディア全土の支配を目指すのではなく、自己自身の安全をはかる防禦的なものだった、といえる。つまりスパルタは直接の勢力範囲を、自らペロポネソス南部のみに限定したのである。しかも、そこに防禦線をひいたのは、外へ向つての攻撃の姿勢ではなく、外からの攻撃に備える姿勢である。しかし、このような体制を維持して行くためには、一方、強力な軍隊が必要である。内部において、メッセニアの反抗、または、全般的に次第に数を増した *heilotai* の反抗的態度に、常に、対抗し得る体制をとつておくと同時に、アルカディアの諸都市との同盟においても、単なる *Philaean policy* のみではなく、軍事的に、スパルタ側の絶對的優位を確立しておかねばならない。600 B. C. 頃にはじまる *homioi* 創出も、真に目指すところは、この防禦体制確立にあつたと考えられるのである。この *homioi* の創出とエフォロイの権限強化については、前掲拙稿^⑦には、その経過を推論したので、くり返さないが、要するに、スパルタでは 550 B. C. 頃に内政が整備され、エフォロイが主宰する民会で国家が運営されるようになり、いわば、スパルタにおける民主政の確立期に到達する。

つまり、スパルタの前六世紀中葉の外交政策の転換——攻撃・征服から友好・同盟へ——は、第二メッセニア戦争の痛手から立ち直った段階以来目指されたもので、前六世紀中葉までの諸改革、諸事件は、すべて、その新しい体制づくりのための布石だったともいえる。

この防禦体制の確立が 550 B. C. 頃のアルゴスとの Thyreatis をめぐる戦争のちと考えられる。アルゴスとの対戦は、実に一世紀以上の間、見られなかったが、これはアルゴスがフェイドンの死や anti-Archie 的な僭主の出現など、多少弱体化していたためではなからうか。この時点で戦争を行なったのも、かつて一度、勢力下においていた Thyreatis を支配下において、スパルタを安泰ならしめるためで、アルゴスそのものを征服して支配下におくという攻撃的意図は見られない。

しかし、スパルタ対アルゴスという観点から歴史を見れば、この両者の対立は古典期からヘレニズム時代を通じて続いており、しばしば、対戦している。前七世紀後半から前六世紀前半にかけての時代は、この両国関係では例外的な時期だったといえる。このように見ると、スパルタの新体制の中に、対アルゴス政策が組みこまれていることが知られる。スパルタがアルカディア諸都市と友好関係を結んだ、ということは、たしかに、彼らがメッセニアを援助しない、という保証になっているが、それとともに、否、むしろ、それ以上に、アルゴスを孤立させる手段であったのである。すなわち、スパルタの周辺に、アルゴスと同盟を結び得る都市を残さないことこそ、スパルタを安泰ならしめる最も有効な手段だったのである。

たしかに、前七世紀までの対アルゴス関係は、主として、エウリュポン家の関心事であった。すなわち、メッセニア戦争においては協力した両家も、対アルゴス戦では協力が見られず、Hysiai での敗戦もこの原因があったと考えられる。しかしながら、前六世紀の中葉からは両王家間での伝承の相違は見られなくなり、すでに挙国一致体制を取り得る段階に到達していることを示している。そして、この新体制こそアギス家の対アルカディア政策とエウリュポン家の対アルゴス政策とを包括し、両者を統合した結果、生れたものにほかならない。

スパルタでは、この体制の確立と同時に、海外との貿易が不活発となり、海から後退する傾向を示す。その原因が奈辺に存するか、あるいは、この新しい防禦体制と何らかのかかわりあいがあるのではないか、と思われるが、この点につ

ては、もふためて考察したい。

- ① Huxley, *op. cit.*, pp. 61-65.
- ② Forrest, *op. cit.*, pp. 71-73.
- ③ Huxley, *op. cit.*, pp. 59-60.
- ④ Wade-Gery, H.T., 'The Rhianos-Hypothesis. ("Ancient Society and Institutions" - Studies presented to V. Ehrenberg. 1966, pp. 289-302)
- ⑤ これは、かなり、立場が違うが、第二メッセニア戦争をこの時期に置く論者もある。例として Kiechle, F., *Messenische Studien*, 1959, SS. 13-14, *ibid.*, *Lakonien und Sparta*, 1963, S. 245; Ehrenberg, V., *Der Staat der Griechen*, 2. Aufl., 1965, S. 294; Jones, A.H.M., *Sparta*, 1967, p. 4 以下。
- ⑥ Wade-Gery, *op. cit.*, pp. 295-299.
- ⑦ これは、たゞ、この『西洋古典学研究』XXI所載の拙稿(二七頁)を参照。
- ⑧ Huxley, *op. cit.*, pp. 68-71.
- ⑨ Tomlinson, *op. cit.*, p. 90.
- ⑩ Forrest, *op. cit.*, p. 74.
- ⑪ 拙稿「メンルタのテゲア征服について」(『大手前女子大学論集』一、一九六七年、八八—九九頁) 九四—九六頁。
- ⑫ Huxley, *op. cit.*, p. 68; Jones, *op. cit.*, p. 44.
- ⑬ Hdt. I. 68 に *τεγεα* Tegea の征服を最後にし、「メンルタに於いて、ロキネンスの大部分が征服された」と述べているのは、このことを指すものと思われる。
- ⑭ この論文は *Μεσσηνιακός ἐκπαλιεὶς ἐκ τῆς Ζαγορας καὶ μὴ ἀετιβαρ Ζηγοροῦς ποταμοῦ*. (Pint., *Mon.* 292b-Gracc. Quaeest. 5)

- ⑮ 一般的説明に「*heilotai* はすべて先住民で、メンルタによって国家の奴隷となり、農耕に従事して生産物の一部によって生活していた」とされる。語源的には *aiōleō* の第二アオリスト受動形 *ēlōō* に由来すると思われる。「捕われたもの」「捕虜」または「戦争の結果、そのやうに現に立たされたもの」を指す (Toynbee, *op. cit.*, pp. 196-197 参照)。この名称の由来からすると、メンルタに於いて、次々と征服されていった集落の先住民と見なされる。このようにして生じたものであれば、当然、ドリス人より数的に多く、侵入者ドリス人に対して、時おり、反抗を試みであろう。その後、メンルタによる対外的征服が進むにつれて、*heilotai* の数は増大し、危険性も高まる。
- ⑯ Forrest, *op. cit.*, p. 75.
- ⑰ 前註⑩参照。
- ⑱ Hdt. I. 82 に「*tyra* と、*tyraion* の使者が到来した頃、メンルタは *Thyrea* をめぐって、アルゴスと抗争中だった。
- ⑲ メンルタ・アルゴス間での対戦が無かった」という意味で、この約一世紀間は例外的な時期」といえる。
- ⑳ 前六世紀の前半に於いて、Pausanias は両王家の伝承の不一致を明らかにしているが、Herodotos は「レオンとヘゲシクレスとが王であった時」(I. 65)、「マナクサンドリダスとアリストンとがメンルタの王となる」(I. 67)と、この表現を用いており、すでに両王家間の恒常的な協調関係が成立しはじめていることを示している。すなわち、単一的な政体制が完成の域に近づいている時代であったことを思わしめる。
- ㉑ 対アルカディア政策の背後には、もちろん、対メッセニアと、このことが考えられている。

(大手前女子大学教授)

Sparta's Anti-Argive Policy

by

Yuichiro Shinmura

The long-lasting conflict between Sparta and Argos began in the second half of the eighth century B. C. Some of the Eurypontid-kings invaded Argolis with Spartan army, but in 669/8 B. C. (the battle at Hysiai) Spartan advance was checked. This Sparta's defeat caused the Messenian revolt (i. e. the Second Messenian war). After the war Sparta reformed by degrees social and political system, which paved the way for the reorientation of policy. In the middle of the sixth century B. C. Sparta changed her foreign policy to the conclusion of friendly relations.

Holding the friendship with the Arcadians, Sparta could keep the Messenians in check and isolate the Argives.

Les territoires politiques du Soudan ouest au XIX^e siècle

par

Masaru Akasaka

Le trait caractéristique de la région du Soudan ouest, c'est que la culture islamique est profondément imprimée dans la société. Il se fait de la communication, depuis longtemps, avec le monde islamique à la côte sud de la Méditerranée, via le Sahara. Ainsi il y a grande mobilité à la base de la société. C'est pourquoi la modèle des arrangements mosaïques des tribus en qualité des microcosmes, dont on usait dans les études des tribus africaines, n'a pas d'efficacité suffisante pour saisir la réalité de cette région. Ces caractères, se sont-ils montrés déjà dans les développements territoriaux des "anciens royaumes" depuis IX^e siècle. Au XIX^e siècle même, à la veille du partage colonial, des vastes territoires politiques (on les appelle, de temps en temps, "empires") ont été formés par les conquêtes des dirigeants, *Uthman dan Fodio*, *Al-hajj Umar* et *Samory Ture*, tous pourvus de l'autorité charismatique. Ces territoires, avec toutes différences, ont des caractères communs en tant qu'ils tiennent aux mouvements réformistes islamiques.